

# 地域総がかりの子どもの育成にかかる当事者としての教職員・保護者・地域住民の認識 －質問紙調査における自由記述分析を通して－

## Recognition of School Staff, Parents, and the Community as Parties Involved in Raising Children throughout the Community : Through Free Description Analysis in the Questionnaire Survey

諏訪 英 広\*      大 天 真由美\*\*      眞弓(田中) 真 秀\*\*\*  
SUWA Hidehiro      DAITEN Mayumi      MAYUMI (TANAKA) Maho

本稿の目的は、地域総がかりによる子どもの育成にかかる当事者としての教職員・保護者・地域の認識実態を質的に明らかにすることを通して、特に、学校ボランティアと協議会の意義等に関する示唆を得ることである。研究方法は、コミュニティ・スクールに関わる当事者（教職員、保護者、地域住民）に対する質問紙調査であり、質問項目のうち、自由記述データ（質的データ）の分析を行った。分析の結果、第一に、学校ボランティアの関わりによる子どもの変化について、9つのカテゴリーが抽出された。全体として、子どもができるようになったこと、子どもの内面的な成長、学校ボランティアが関わることのメリットという大きく3つの変化が看取された。第二に、協議会における「子どもの育成」に関わる話題・内容のうち特に重要と考えたことについて、8つのカテゴリーが抽出された。全体として、子どもそのものに対することと子どもを取り巻く大人に関することという大きく2つの点が重要な話題・内容と認識されていることが看取された。以上の結果は、学校ボランティアと協議会の意義とも解釈し得ることが示唆された。

キーワード：地域総がかりによる子ども育成、当事者意識、コミュニティ・スクール、自由記述分析

Key words : child development by the regional coverage, awareness of ownership, community school, free description analysis

### I. 問題の所在と研究の目的

こんにち、地域総がかりによる子どもの育成（育ちや学び）のために、「地域とともにある学校づくり」というスローガンのもと、学校・保護者・地域住民が当事者意識を持って連携・協働することが求められている。これまでに、学校支援ボランティア、学校評議員制度、学校支援地域本部等の制度が導入されてきているが、それらは、学校の求めに保護者・地域住民が応えるという、言わば一方向的な関係にとどまっている状況もうかがえる。そのような状況を変え、学校・保護者・地域住民の双方向的な関係に基づく子どもの育成を推進するために、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正（2004年6月）により、保護者や地域住民等が一定の権限と責任を持って学校運営に参加・参画する制度である学校運営協議会（以下「協議会」）が法規定された。協議会には、3つの権限が付与され、構成員の当事者意識に基づく熟議を通して、学校運営にかかるミッションの設定や共有を図るとともに、学校支援活動や地域貢献活動を具体化・現実化させる役割を担うことが期待されている。協議会が設置された学校であるコミュニティ・スクール（Community School；以下「CS」）に対する期待や関心、設置数の増加に伴い、CSに関する理論・実証・事例研究が蓄積されてきている（佐藤 2016 など）。

このうち、本稿の主題である当事者意識に関して、霜川他（2014）は、山口県の多くのCSへの参画・調査を踏まえ、成功的なCSは、保護者や地域住民が、教育や子育ての当事者意識を持ち、「共に楽しみ」「共に創造している」ことを明らかにしている。また、木下（2021）は、教育に関わる当事者としての住民の認識は、学校参加活動を通じた子どもや教師との関わりから徐々に形成されるものであり、CSの政策基盤として、各地域における学校と住民の関係を踏まえた学校参加のビジョンを各自治体が十分に議論することが必要であることを明らかにしている。また、諏訪他（2021a）は、協議会の会話分析を踏まえて、協議会運営での意思形成過程における当事者意識の重要性とその内実を明らかにしている。さらに、諏訪他（2021b）は、2つの小学校の校長・学校事務職員・CS委員に対するインタビュー調査を踏まえて、CSを媒介とする当事者意識の醸成要因として、協議会の適切な運営及び熟議の成熟を重要点として、学校ビジョンや協議会のスローガンを当事者同士で共同作成・共有すること、学校や地域課題の解決に向けて地域の組織・団体等を関連付けつつ、各当事者に役割を付与すること等を明らかにしている。そして、これらの研究知見を参考に、筆者らは、諏訪他（2022）において、地域総がかりによる子どもの育成を推進するための実

\* 川崎医療福祉大学

令和4年7月15日受理

\*\* 兵庫教育大学大学院（専門職学位課程）教育実践高度化専攻教育政策リーダーコース

\*\*\* 大阪教育大学

実践的示唆を得るために、子どもの育成にかかる当事者意識に焦点を当て、A市の教職員、保護者、地域住民（以下、「3者」）を対象とする質問紙調査の分析を通して、当事者意識の実態とその醸成に関連する要因を明らかにしている。具体的には、3者とも子どもの育成にかかる当事者意識が高く、特に地域住民の意識が高いこと、3者とも子どもの育成におけるCSの効果に関する認識は必ずしも高くないこと、3者間の多少の差異はあるものの、CSに対する認知・CSの効果に対する認識・協議会参加時の姿勢と当事者意識の醸成要因との間に正の相関が見られること、といった主要な知見を得ている。

そこで本稿は、地域総がかりによる子どもの育成にかかる3者の当事者意識に関する先行研究の知見を踏まえた上で、諏訪他（2022）の継続研究という位置づけとして、地域総がかりの子どもの育成にかかる当事者としての3者の認識実態を質的に明らかにすることを通して、特に、学校ボランティアと協議会の意義等に関する示唆を得ることを目的とする。

なお、本稿が扱うデータは、事例調査データの域を出ないもの、3者を対象とする全市的な調査データの分析により、地域総がかりの子どもの育成にかかる当事者の認識を質的に明らかにすることに一定の意義があると考ええる。

## II. 研究の方法

### 1. 事例自治体及び事例校の概要

本稿では、先行研究として取り上げた諏訪他（2022）で実施した調査データを用いる。調査対象としたA市は、人口3万人規模の山間地域に所在する自治体であり、小学校・中学校の数は、小学校15校、中学校6校である。CSは、2017年12月の初発校以降、2020年度末までに全校（12小学校、4中学校、2複数校）に設置された。A市を調査対象とした理由は、子どもの育成と地域活性化を一体的に進めるための有効なツールの一つとしてCSの全市的導入を政策決定し、その効果的運用を目指している事例であること、筆者らが初発校を含む複数のCSにアドバイザーとして関わっていることから調査協力を得やすいことの2点である。

### 2. 調査の概要

調査の概要は、次の通りである。

2021年8月に全校長に調査依頼を行い、承諾が得られた学校（13校・61.9%）に3者分（教職員：管理職・講師を含む全教職員数、保護者：協議会委員を含む保護者、地域住民：協議会委員及び学校ボランティア。保護者・地域住民については、10名以上を目安として、学校に一任した。）の調査票を送付した。保護者と地域住民には学校から調査票を配布してもらった。3者とも、9月末を学校提出の期限とした（無記名、個封。WEB回答も可）。また、調査票とは別に、調査の目的と倫理的配慮（無記名方式であること、調査結果は統計的に処理されること、回答（データ）は本研究以外の目的には用いないこと、調査結果を論文等にまとめる際には個

表1 回答者の基本属性

		教職員 (144)		保護者 (92)		地域住民 (76)		全体 (312)	
		N	%	N	%	N	%	N	%
1. 学校種	小学校	79	54.9%	52	56.5%	44	57.9%	175	56.1%
	中学校	65	45.1%	40	43.5%	32	42.1%	137	43.9%
2. 学校運営協議会 委員	委員	19	13.2%	22	25.6%	64	84.2%	105	34.3%
	委員ではない	125	86.8%	64	74.4%	12	15.8%	201	65.7%
3. 地域連携担当	担当	14	9.8%	—		—		—	
	担当ではない	129	90.2%						
4. 管理職	管理職	24	16.7%	—		—		—	
	管理職ではない	120	83.3%						
5. 学校事務職員	事務職員	13	9.0%	—		—		—	
	事務職員ではない	131	91.0%						
6. 学校ボランティア	している	—	—	14	16.1%	47	65.3%	—	
	していない			73	83.9%	25	34.7%		
7. 地域学校協働活 動推進員	委員	—		—		11	15.9%	—	
	委員ではない					58	84.1%		
8. 年齢	～20代	—		—		0	0.0%	—	
	30代					5	6.6%		
	40代					10	13.2%		
	50代					8	10.5%		
	60代					32	42.1%		
	70代					20	26.3%		
9. 本校に通う子ども	80代	—		—		1	1.3%	—	
	いる					15	19.7%		
	いない					61	80.3%		

		Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.
10. 教職経験年数		18.00	13.43	—		—		—	
11. 現任校在校年数		2.85	1.82	—		—		—	
12. ボランティアの年数		—	—	5.10	4.18	6.45	4.53	6.19	4.46
13. 1月あたりのボランティア回数		—	—	1.50	0.76	5.41	7.13	4.74	6.65

人・学校・団体情報等を保護すること、回答者に一切の迷惑をかけないこと）等を記した文書を全協力者に配布した。文書には、調査票への回答により調査協力への同意を得たものと理解する旨を明記した。配布数・回収数・回収率は、教職員：160名・144名・90.0%、保護者：106名・92名・86.8%、地域住民：113名・76名・67.3%、全体：379名・312名・82.3%であった。回答者の基本属性を示したものが表1である（注1）。

これらのデータのうち、本稿で分析の対象とするデータは、地域総がかりの子どもの育成にかかる3者それぞれの認識が示される2つの自由記述データである。具体的には、①学校ボランティアとの関わりによる子どもの変化と②協議会における「子どもの育成」に関わる話題・内容のうち特に重要と考えたことである。記述データの分析に当たっては、著者全員の共同討議により行った。なお、先述した全データのうち本稿で扱うデータの概要は、分析結果のところで示す（注2）。

## III. 分析の結果

### 1. 学校ボランティアとの関わりによる子どもの変化

はじめに、3者それぞれが、学校ボランティアとの関わりによる子どもの変化をどのように捉えているか見ていく。調査では、「現在、学校ボランティアの方々が子どもに関わっておられます。このことで子どもの変化を感じることがありますか？」という質問に対して、肯定的回答をした者に対して、「子どもの変化を具体的に教えてください。」と自由回答を求めた。3者の回答数・回答率は、教職員79名・54.9%、保護者43名・44.4%、地域住民25名・32.9%、全体147名・47.1%であった。また、同一回答者の回答において、異なる内容と判断された場合は、別々の記述として処理した。その結果、記述数は、教職員87件、保護者44件、地域住民30件、全体161件となった。続いて、3者別に記述内容の分類を行った。初めに、最も記述数の多い教職員のデータ

表2 学校ボランティアとの関わりによる子どもの変化

①教職員:87件	②保護者:44件	③地域住民:30件	全体:161件
1. あいさつ:8件 ○地域の方との距離が近く、積極的に挨拶をしたり、話をしたりする姿が見られる。 ○少しずつだが挨拶の声が大きくなってきた。	1. あいさつ:10件 ○地域の方の顔を覚えて、あいさつしたり、話しかけることができてきている。 ○登校で見守りなどで一緒に歩いているのであいさつができたようになった。	1. あいさつ:10件 ○子どもたちから声をかけられたり、あいさつをしたりして、笑顔がみられるようになった。 ○●会との交流で、近隣の年配の方の顔と名前をお互いに覚え、いろいろな人に挨拶できるようになったと思う。	28件
2. 学びや活動の深まり:13件 ○総合的な学習の時間や家庭科等で地域の人から学ぶ学習を打ち出す際は、普段よりも意欲的に学習に取り組む姿勢がみられます(自分から進んで質問をするなど)。  ○いろいろな方と交流することで、こどもたちが新たな発見や視野が広がり、学びが深まっている。	2. 学びや活動の深まり:9件 ○学校ボランティアの方が来てくださった日は、子どもの方から“こんな人が来てこんなことしたよ”と教えてくれますし、授業とはまた違う教科書にない学びに触れ合っているなと思いました。 ○昔遊び等、高齢者から伝統等を教えてもらい、家でもやっている姿を見て、物等を大切にすることができるようになった。	2. 学びや活動の深まり:5件 ○自然体験学習の中で食を考えた。もち米作りにこどもたちが「田植え～収穫～もちつき」の一貫した作業を体験することで、食のありがたさ、自然のありがたさに気がついたこと。 ○●踊りの踊り方を地域の方に正しく教えてもらうことで、自信を持って運動会に参加できると思う、ふるさとを愛する心も育っていると思う。	27件
3. 地域とのつながり・地域が好き:11件 ○地域に対する思いや地域のことを知りたいという気持ちが強くなったように思います。 ○教員とは違う立場で接していただくことにより、多くの人から見守られていることに気づく。	3. 地域とのつながり・地域が好き:7件 ○日常会話に地域のボランティアの名前が出るが増えた。とても身近な存在になっていると思う。 ○●●町は人口が少ないことからボランティアに入られる方は子ども達のことを知た方が多く、学校以外の場面でも繋がりができてきている。地域に興味を持つようになった。	3. 地域とのつながり・地域が好き:2件 ○途中で雨が降っても感じよく微笑んでくれる。  ○自分は登校時の見守りを行っている。登校時のあいさつを行うことにより、子どもたちに顔を覚えてもらうことができ、学校へいったとき、また下校時等もしっかりあいさつができるようになったと感じる。	20件
4. 自己肯定感・自信:9件 ○地域の方への感謝を述べたり、地域の方から褒めていただくことが、自己肯定感につながっていると感じることがある。 ○学校ボランティアのかたとの関わりは、子どもにとって良い刺激になると思う、あいさつなど褒められると子どもたちの自信ややりがいにつながる瞬間がある。	4. 自己肯定感・自信:4件 ○子どもがのびのび育っています。  ○子どもたちの普段とは違う行動が見えるので。	4. 自己肯定感・自信・成長:5件 ○継続して関わることによって、心身の成長を感じる(体の成長、言葉遣い、雰囲気など)。 ○自主性が芽生えたかなと思うことがある。	18件
5. 変化が分からない・見えない・実感できない:10件 ○地域の人々のすごさなどを感じていると思うが、変化となるとよく分からない(そう思わないとは思わない)。 ○コロナ対策につき、昨年、今年は外部交流がほほない状況につき、本校の様子については何とも言えない。	5. 変化が分からない・見えない・実感できない:6件 ○まず、どのようなボランティアがあるのか知ること。知らないとやりたくてもできない。 ○自由意思でのボランティア活動のため。	5. 変化が分からない・見えない・実感できない:2件 ○時々しかないので、変化は分かりません。担任の先生や学校全体で変化を感じられたらそれかも知れません。 ○地域の方々との関わる機会が増え、子どもたちが地域について考えてくれるきっかけとなると思う。	18件
6. コミュニケーション能力向上:12件 ○いろいろな方々とのふれあいの中で、コミュニケーション力につながっていると感じます。 ○家族、職員以外に関わりを持ち、コミュニケーション能力を身に付けることができる。	6. コミュニケーション能力向上:2件 ○よく話ができるようになった。  ○年齢問わず関わりができるので、誰に対しても対応ができている。	6. コミュニケーション能力向上:3件 ○自分の思考を交えながら、大人(地域の方)と話しができる。 ○好奇心旺盛になり、自分の考えをはっきり発言できる子どもに成長している。	17件
7. 感謝:7件 ○教えていただいた感謝の気持ちを込めてボランティアの方へ小物作りをした児童もいた。  ○自分たちのために力を貸してくださっていることへの感謝の気持ち。	7. 感謝:3件 ○地域の方や学校ボランティアの先生が子どもたちと関わることで、恵みや刺激を受けることがあり、感謝することが度々あった。 ○地域の方々へ感謝の気持ちを家で言うようになった。	7. 感謝:3件 ○プール掃除等、共にすることで、感謝の心も育つと思う。  ○地域の人々への感謝の気持ち。	13件
8. 安全安心:10件 ○地域の方々の支援が多いので、子どもたちの学校生活や学習において、落ち着きと安心感があるように思われます。  ○地域のおじいさん、おばあさんとして、教職員とは異なる表情や行動がみられることがある。	8. 安全安心:1件 ○どういう方たちが「学校ボランティア」の方たちがよく分かりませんが、たくさんの方々がお手伝いしてくださり、通学時に会うと安心するようです。	8. 安全安心:0件	11件
9. 楽しみ:7件 ○放課後サポートでは、先生が来られた際、こどもたちがとても喜んでいる。 ○本の朗読に来てくださるボランティアさんがおられますが、中学生でとても楽しそうで、子供に戻ったような顔をしています。	9. 楽しみ:2件 ○子どもが楽しみにしていること。  ○「ボランティアの〇〇さんがほめてくれた」と言って、とても張り切って勉強している時もある。先生とは違う人からの言葉が、とてもうれしいようです。	9. 楽しみ:0件	9件

分析を行ったところ、9 カテゴリーが抽出された。次に、このカテゴリーを用いて、保護者と地域のデータ分析を行ったところ、新たなカテゴリーは抽出されなかった。カテゴリー名と3者ごとのカテゴリー内の記述数及び代表的記述例(原文ママ)を示したものが表2である。なお、カテゴリーは全体の記述数の多い順に並べている。

記述数の多寡が統計的な有意性を示すものではないものの、回答傾向を相対的に読み取るものの一つの指標として分析結果を見ていきたい。全体において最も記述数の多いカテゴリーは「1. あいさつ:28件」であり、保護者、地域では最も記述数が多いカテゴリーであった。記述は、「地域の方の顔を覚えて、あいさつしたり、話しかけることができてきている。:保護者」、「○子どもたちから声をかけられたり、あいさつをしたりして、笑顔がみられるようになった。:地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「2. 学びや活動の深まり:27件」であり、教職員では最も記述数が多いカテゴリーであった。記述は、「いろいろな方と交流することで、こどもたちが新たな発見や視野が広がり、学びが深まっている。:教職員」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「3. 地域とのつながり・地域が好き:20件」であった。記述は、「地域に対する思

いや地域のことを知りたいという気持ちが強くなったように思います。:教職員」、「日常会話に地域のボランティアの名前が出るが増えた。とても身近な存在になっていると思う。:保護者」、「自分は登校時の見守りを行っている。登校時のあいさつを行うことにより、子どもたちに顔を覚えてもらうことができ、学校へいったとき、また下校時等もしっかりあいさつができるようになったと感じる。:地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「4. 自己肯定感・自信:18件」であった。記述は、「地域の方への感謝を述べたり、地域の方から褒めていただくことが、自己肯定感につながっていると感じることがある。:教職員」、「子どもがのびのび育っています。:保護者」、「継続して関わることによって、心身の成長を感じる(体の成長、言葉遣い、雰囲気など)。:地域住民」などが見られた。このカテゴリーと同じ記述数のカテゴリーは、「5. 変化が分からない・見えない・実感できない:18件」であった。記述は、「地域の人々のすごさなどを感じていると思うが、変化となるとよく分からない(そう思わないとは思わない)。:教職員」、「まず、どのようなボランティアがあるのか知ること。知らないとやりたくてもできない。:保護者」、「時々しかないので、変化は分かりま



せん。担任の先生や学校全体で変化を感じられたらそれかも知れません。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「6. コミュニケーション能力向上：17件」であった。記述は、「いろいろな方々とのふれあいの中で、コミュニケーション力につながっていると感じます。：教職員」、「年齢問わず関わりができるので、誰に対しても対応ができています。：保護者」、「自分の思考を交えながら、大人（地域の方）と話しができる。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「7. 感謝：13件」であった。記述は、「自分たちのために力を貸してくださっていることへの感謝の気持ち。：教職員」、「地域の方々へ感謝の気持ちを家で言うようになった。：保護者」、「地域の人々への感謝の気持ち。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「8. 安全安心：11件」であり、地域の記述はなかった。記述は、「地域の方々の支援が多いので、子どもたちの学校生活や学習において、落ち着きと安心感があるように思われます。：教職員」、「どういった方たちが「学校ボランティア」の方たちがよく分かりませんが、たくさんの地域の方がお手伝いしてくださり、通学時に会うと安心するようです。：保護者」などが見られた。最後のカテゴリーは、「9. 楽しみ：10件」であり、地域の記述はなかった。記述は、「放課後サポートでは、先生が来られた際、こどもたちがとても喜んでいる。：教職員」、「子どもが楽しみにしていること。：保護者」などが見られた。

## 2. 協議会における「子どもの育成」に関わる話題・内容のうち特に重要と考えたこと

次に、協議会委員あるいは協議会に出席した経験のある3者それぞれが、協議会における「子どもの育成」に

関わる話題・内容のうち特に重要と考えたことについて見ていく。調査では、「学校運営協議会の中で、『子どもの育成』に関わる話題・内容のうち、あなたが特に重要と考えたことは何ですか?」と自由回答を求めた。3者の回答数・回答率は、教職員30名・20.9%、保護者11名・11.6%、地域住民48名・63.2%、全体89名・28.5%であった。また、同一回答者の回答において、異なる内容と判断された場合は、別々の記述とした。その結果、記述数は、教職員32件、保護者11件、地域住民48件、全体91件となった。

はじめに、最も記述数の多い地域のデータ分析を行ったところ、8カテゴリーが抽出された。次に、このカテゴリーを用いて、教職員と保護者のデータ分析を行ったところ、新たなカテゴリーは抽出されなかった。カテゴリー名と3者ごとのカテゴリー内の記述数及び代表的記述例を示したものが表3である。なお、カテゴリーは全体の記述数の多い順に並べている。

ここでも、前項同様、記述数及び記述例に着目し、分析結果を見ていきたい。全体において最も記述数の多いカテゴリーは「1. 育てたい子ども像やそれに関連する課題：35件」であり、3者とも最も記述数が多いカテゴリーであった。記述は、「どんな子どもを育てたいのかの共通理解を図る。：教職員」、「教育目標にある豊かな人間力を持ち、●●を創造する児童の育成。：保護者」、「積極性、創意工夫、自主性をそだてる。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「2. 大人総がかりでの子どもの育成：17件」であり、3者とも2番目に記述数が多いカテゴリーであった。記述は、「お互いの関係が対等でありつつも、お互いを尊重した関係で、「共に子どもの育成を行う」という意識を持ち

表3 協議会における「子どもの育成」に関わる話題・内容のうち特に重要と考えたこと

①教職員:32件	②保護者:11件	③地域住民:48件	全体:91件
1. 育てたい子ども像やそれに関連する課題:11件 ○学校と地域の「めざす子どもの姿の共有」。 ○どんな子どもを育てたいのかの共通理解を図る。	1. 育てたい子ども像やそれに関連する課題:6件 ○教育目標にある豊かな人間力を持ち、●●を創造する児童の育成。 ○学力も大切ですが、一番望みたいといけなところは、人間味(思いやり)だと思ふ。	1. 育てたい子ども像やそれに関連する課題:18件 ○積極性、創意工夫、自主性をそだてる。 ○将来のまちづくりに参画する人材の育成	35件
2. 大人総がかりでの子どもの育成:5件 ○子どものために互いが楽しく前向きに考え実行すること。 ○お互いの関係が対等でありつつも、お互いを尊重した関係で、「共に子どもの育成を行う」という意識を持ち続けられること。	2. 大人総がかりでの子どもの育成:3件 ○学校との連携。 ○まだ委員になって日が浅く、よく分かりませんが、子どもの気持ち、親の気持ち、委員として(地域の人となつて)の気持ちをそれぞれ考えてみる。	2. 大人総がかりでの子どもの育成:9件 ○地域、PTAが連携して子どもたちのために学校運営を円滑にできる様に役割分担をして協力すること。 ○学校と保護者の主体的な教育を地域でバックアップすること。何より子どもたちの成長をサポートすること。	17件
3. 子どもの地域貢献や地域との関わり:4件 ○児童の地域貢献。 ○地域でのボランティア活動などの自主的な取組。	3. 子どもの地域貢献や地域との関わり:1件 ○地域との関わり方。	3. 子どもの地域貢献や地域との関わり:9件 ○こどもたちが、地域に関心を持ち、将来、この町に住み続けられるようにする取組ができないか。 ○「こどもたちが参画できる」、このことから始まった「●の場」「クリーン作戦」が子どもの手によって運営されている。	14件
4. 家庭・保護者や地域の実態:3件 ○地域の様子 ○親世代がいかに関わり、動いてくれるかということ。	4. 家庭・保護者や地域の実態:0件	4. 家庭・保護者や地域の実態:5件 ○OPの人がもっと入ってくると良い。 ○家庭内での子どもたち、外での子どもたち。	8件
5. 子どもが主体であること:2件 ○子どもたちの思いが反映されること。 ○地域、保護者、学校でなく子ども主体であること。	5. 子どもが主体であること:0件	5. 子どもが主体であること:4件 ○子どもたちの「こんなしたい!」をかなえる(実現させる。)。) ○子どもとの会話で、子どもたちの話をゆっくり聞いてあげることだと思ふ。	6件
6. それぞれの立場から見た子どもの姿:3件 ○地域から見た子どもの育ち。 ○地域から見た子どもの課題。		6. それぞれの立場から見た子どもの姿:2件 ○子どもたちと関わる接点を増やす。 ○子どもたちとふれあったり、話をし、子どもを知る。	5件
7. 具体的な支援内容やその課題:2件 ○学習支援。 ○活動の精選。	7. 具体的な支援内容やその課題:1件 ○他にない体験。	7. 具体的な支援内容やその課題:0件	3件
8. 学校運営協議会の運営、熟議:2件 ○協議の中で一人一人が意見を伝え、しっかりと熟議すること。 ○子どもの健やかな成長のための学校運営協議会であること。【子どもありき】の組織。	8. 学校運営協議会の運営、熟議:0件	8. 学校運営協議会の運営、熟議:1件 ○学校運営協議会での熟議	3件

続けられること。：教職員」,「まだ委員になって日が浅く、よく分かりませんが、子どもの気持ち、親の気持ち、委員として（地域の人となって）の気持ちをそれぞれ考えてみること。：保護者」,「学校と保護者の主体的な教育を地域でバックアップすること。何より子どもたちの成長をサポートすること。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「3. 子どもの地域貢献や地域との関わり：14件」であった。記述は、「地域でのボランティア活動などの自主的な取組。：教職員」,「地域との関わり方。：保護者」,「こどもたちが、地域に関心を持ち、将来、この町に住み続けてくれるようにする取組ができないか。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「4. 家庭・保護者や地域の実態：8件」であり、保護者の記述はなかった。記述は、「親世代がいかに関わり、動いてくれるかということ。：教職員」,「子どもたちが、地域に関心を持ち、将来、この町に住み続けてくれるようにする取組ができないか。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「5. 子どもが主体であること：6件」であり、保護者の記述はなかった。記述は、「地域、保護者、学校でなく子ども主体であること。：教職員」,「子どもたちの「こんなしたい！」をかなえる（実現させる。）。：地域住民」などが見られた。次に記述数の多いカテゴリーは、「6. それぞれの立場からみた子どもの姿：5件」であり、保護者の記述はなかった。記述は、「地域からみた子どもの育ち。：教職員」,「子どもたちとふれあったり、話をし、子どもを知る。：地域住民」などが見られた。最後の2つのカテゴリーは、同じ記述数であった。カテゴリー「7. 具体的な支援内容やその課題：3件」については、地域の記述はなかった。記述は、「活動の精選。：教職員」,「他にない体験。：保護者」などが見られた。カテゴリー「8. 学校運営協議会の運営、熟議：3件」については、保護者の記述はなかった。記述は、「子どもの健やかな成長のための学校運営協議会であること。【子どもありき】の組織。：教職員」,「学校運営協議会での熟議：地域住民」などが見られた。

#### IV. まとめと考察

本稿の目的は、地域総がかりの子どもの育成にかかる3者（教職員・保護者・地域住民）の認識を質的に明らかにすることを通して、特に、学校ボランティアと協議会の意義等に関する示唆を得ることであった。具体的作業としては、3者を対象とする質問紙調査における自由記述データの分析を行った。以下では、得られた知見を整理しつつ、解釈・考察を加えたい。

はじめに、学校ボランティアの関わりによる子どもの変化に関する記述分析の結果、9つのカテゴリーが抽出された。これらのカテゴリー及び含まれる記述を概観すると、①子どもができるようになったこと、②子どもの内面的な成長、③学校ボランティアが関わることのメリットという大きく3つの変化を指摘できる。

例えば、①の子どもができるようになったことは、「1.

あいさつ」や「6. コミュニケーション能力向上」である。これは学校ボランティアと関わることで、地域の年配の人と挨拶を通じた交流を行うことができている。多くの学校では、学校の取り組みの一環として「あいさつ」を行うことが挙げられており、学校ボランティアとの関わりが、子どもの教育の醸成につながっている事例といえよう。また、年齢の異なる人との関わりを通して、自身の考えを伝えるといったことができるようになったという点を大人は子どものできるようになったこととして認識している。

また、②の子どもの内面的な成長では、「5. 自己肯定感・自信」や「7. 感謝」を持てるようになったことが挙げられる。3者とも、地域の人や保護者と関わる中でほめてもらう、認めてもらうといったことを通して、子どもの自己肯定感が高まっているのではないかという認識を有していた。これは、子どもにとって、多くの大人と関わることによる「包みこまれ感覚」（池田 2000, p.31）が子どもの自信を育てていることの一つの表れと解釈され得る。また、学校ボランティアの人に対して、家でも感謝の気持ちを述べる、学校の活動の中でもお礼の気持ちを持つことは、大人から「やってもらう」だけでなく、「ボランティアの人に感謝の気持ちを込めて小物づくりをする」といった具体的な行動につながっており、子どもの成長として捉えることができるのではないだろうか。

そして、その背景には、③学校ボランティアが関わることのメリットとしての「2. 学びや活動の深まり」や「3. 地域とのつながり・地域が好き」,「8. 安全安心」,「9. 楽しみ」があると推察される。学校ボランティアが関わることで、地域の伝統行事や昔遊びを知る等、教科書以外の学びや総合的な学習の時間の充実につながっている、また、教員とは異なる大人との関わりにより、地域をより知りたいといった子どもの地域への関心の高まりや、学校ボランティアと関わることを子どもが楽しみにしている実態が看取される。子どもにとって、少しでも学校での楽しみが増えることは、学校に行くことへの動機づけにつながることから、学校ボランティアによる教育効果の可能性が示唆されると考えられる。また、地域の人に関わることで子どもが安心できることを教員や保護者が認識していることから、子どもにとって、安全で安心な場や機会の提供を促している可能性が看取される。

一方で、「5. 変化が分からない・見えない・実感できない」との記述も見られた。この「わからない」の内実は、教職員、保護者、地域で記述内容が異なる面があった。まず、教員は、子どもの変化まで見ることができていないという点と、今回の調査がコロナ感染拡大期ということもあり、学校ボランティアが通常よりも関わっていないという外部交流の少なさから、回答できないと捉えた可能性が高い。また、保護者は、そもそも学校ボランティアの取り組みが何か分からないため、それに該当する子どもの変化が分からないと回答したのかもしれない。

さらに、地域の人は、単発的な子どもとの関わりという点から、変化を感じることが難しいと考えられる。

次に、協議会における「子どもの育成」に関わる話題・内容のうち特に重要と考えたことについて述べる。分析の結果、8つのカテゴリーが抽出された。これらのカテゴリー及び含まれる記述を概観すると、①子どもそのものに対することと、②子どもを取り巻く大人に関することという大きく2つの点が重要な話題・内容と認識されていることが看取された。

①子どもそのものに対することについては、「1. 育てたい子ども像やそれに関する課題」、「3. 子どもの地域貢献や地域との関わり」、「5. 子どもが主体であること」や「6. それぞれの立場からみた子どもの姿」である。また、②子どもを取り巻く大人に関することについては、「2. 大人総がかりでの子どもの育成」、「4. 家庭・保護者や地域の実態」、「7. 具体的支援内容やその課題」や「8. 学校運営協議会の運営、熟議」である。

以上2点に関する記述を概観すると、①子どもそのものに対することについては、どのように育てるのかといった子どもに対することと言える。また、②子どもを取り巻く大人に関することについては、学校・家庭（保護者）・地域の実態を捉えた上で大人が総がかりでいかに子どもを育成するのか、その育成・支援内容は何であるか、それらを話し合う学校運営協議会とはいかなる場であるのかということと言える。そして、これらは全て、「子どもの育成」として深く関わっている。特に、「1. 育てたい子ども像やそれに関する課題」が、最も記述数の多い結果であったことから、協議会の性質そのものにも関わる可能性が高いことが推察される。つまり、協議会の中では、子どもの様子を共有して、学校の状況を知ることが求められる。その際に、「どのような子どもを育てたいのか」を3者が共有することは、議論の基礎となる。また、そのためには「2. 大人総がかりで子どもの育成」をすることや「6. それぞれの立場からみた子ども」を共有することが必要となる。記述内容から伺えるように、子どもとそれを取りまく環境の重要性が指摘されたことは、協議会としての機能がある一定程度保たれていると解釈可能と考える。

一方で、3者の中で保護者の回答が0件であった項目（「4. 家庭・保護者や地域の実態」、「5. 子どもが主体であること」や「6. それぞれの立場からみた子どもの姿」「8. 学校運営協議会の運営、熟議」と、地域住民の回答が0件であった「7. 具体的支援内容やその課題」については、明確な解釈が難しい面があるが、協議会の性質による可能性が考えられる。つまり、教員は「どのような子どもを育てたいか」という視点を学校として認識し協議会でも重要視しており、協議会に関わる地域住民は、「子ども」に関する意識が高く、そこに興味関心を持っているのではないだろうか。一方で、保護者は、興味関心が少ないのではなく、自身の子どもの中心を考えており、地域の子どもの意見が出なかったことが推察される。

以上、質的データの分析を通して、学校ボランティアの関わりによる子どもの変化と協議会における「子どもの育成」に関わる話題・内容という2点に関する3者の認識について解釈・考察を行ってきたが、得られた知見は、協議会の意義とも解釈し得ることが示唆される。

しかし一方で、今後の研究課題も指摘し得る。第一は、本稿では質的データの分析において、学校経営研究者3名の共同討議によるKJ法（川喜多2017）を採用したが、分析結果の妥当性を検証するためにも、カテゴリー抽出、カテゴリー間の関連性等に関する計量分析的手法採用の必要性である。そのことによって、どのような属性・経験・認識を持っている回答者が学校ボランティアと協議会についてどのような認識を持っているのかといった関連性分析が可能となる。第二は、本稿で実施した質問紙調査回答者に対する追跡調査の必要性である。CS設置から年数を重ねていく中で、例えば、本稿で焦点を当てた学校ボランティアと協議会に対する認識について変化が生じるのか生じないのか、その変化の有無や程度に影響を及ぼす要因は何なのか等を継続的に調査し、分析することは、CSの持続性や発展性の規定要因を明らかにすることにつながると考える。

#### <注>

注1：本稿での分析対象外、すなわち、自由記述項目に回答がない者のデータも含むが、回答者全体の概要を示すこととする。

注2：本稿で扱う自由記述項目2問それぞれに対する回答有無が異なるため、各項目の分析結果の冒頭で回答者等の情報を示す。

#### <引用文献>

- ・池田寛（2000）『学力と自己概念－人権教育・解放教育の新たなパラダイム－』会報出版、p.31。
- ・木下豪（2021）「地方小都市における地域住民の学校参加の意義に関する一考察－教育に関わる当事者としての認識形成に着目した事例分析－」『日本教育経営学会紀要』第56号、pp.70-86。
- ・佐藤晴雄（2016）『コミュニティ・スクール（増補改訂版）』エイデル研究社。
- ・霜川正幸・静屋智（2014）「コミュニティ・スクールの実効性を高める運営のあり方」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第38号、pp.29-38。
- ・諏訪英広・大天真由美・田中真秀（2022）「学校・保護者・地域の連携・協働による子どもの育成に関する調査研究－コミュニティスクールに焦点を当てて－」『学習開発学研究』第14号、pp.141-149。
- ・諏訪英広・藤井瞳・田中真秀（2021a）「学校運営協議会の会議運営に関する一考察－『意思形成』過程に焦点を当てて－」『川崎医療福祉学会誌』31(2)、pp.171-179。
- ・諏訪英広・大天真由美・田中真秀（2021b）「地域総



がかりによる子ども育成における当事者意識の醸成に関する研究－A市のコミュニティ・スクールの事例より－」『兵庫教育大学学校教育学研究』第34巻，pp.117-130。

#### <参考文献>

- ・青木一・前川浩一（2019）『コミュニティ・スクールを持続可能にする地域コーディネーターのキックオフ－子どもを育てるまちづくり・子どもから学ぶまちづくり－』三恵社。
- ・岩永定・柏木智子・芝山明義他（2013）「子どもの自己肯定意識の実態とその規定要因に関する研究」『熊本大学教育学部紀要』第62号，pp.101-108。
- ・春日市教育委員会・春日市立小中学校編（2017）『市民とともに歩み続けるコミュニティ・スクール』ぎょうせい。
- ・金子郁容，鈴木寛，渋谷恭子（2000）『コミュニティ・スクール構想－学校を変革するために－』岩波書店。
- ・川喜田二郎（2017）『発想法 改訂版－創造性開発のために－』中公新書。
- ・黒崎勲（2000）『新しいタイプの公立学校－コミュニティ・スクール立案過程と選択による学校改革－』同時代社。
- ・小西哲也・中村正則編（2019）『奇跡の学校－市民とともに歩み続けるコミュニティ・スクール－』風間書房。
- ・小林昇光（2015）「学校運営協議会会議分析の試み－発言表を用いた会議分析－」『教育経営学研究紀要』17号，pp.71-77。
- ・仲田康一（2010）「学校運営協議会における『無言委員』の所在－学校参加と学校をめぐるミクロ社会関係－」『日本教育経営学会紀要』第52号，pp.96-110。
- ・日高和美（2007）「学校運営協議会における意思決定に関する考察－校長の認識に焦点を当てて－」『教育経営学研究紀要』第10号，pp.45-54。
- ・広瀬省吾・森保之（2020）「コミュニティ・スクール設置準備期の研究－教職員の当事者意識変容のための熟議と地域連携・協働カリキュラムの具体化・具現化を通して－」『福岡教育大学紀要』第69号，pp.61-68。
- ・宮崎稔（2020）『学校も地域もひらくコミュニティ・スクール－無理せず，楽しく，かろやかに－』農山漁村文化協会。

#### <付記>

調査にご協力くださった皆様に心よりお礼申し上げます。